

二〇二〇年度

帰国生入試 問題（国語）

注 意 書 き

- ・試験開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- ・解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
- ・この冊子には問題が一ページから一九ページまであります。万一、足りない部分があったり印刷が見にくい場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
- ・解答はすべて解答用紙の枠わくの中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけません。
- ・字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
- ・解答用紙を集め終わっても、試験監督の指示があるまでは席を立たないこと。

一、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「よっしゃー到着！」

智也と雄介は、河川敷に着いたとたん、背負っていたリュックを乱暴に地面に投げ捨てた。雪の上にリュックを置くと濡れてしまうとか、そつと置かないと中身がぐちゃぐちゃになってしまふとか、そういうことは端から気にしていない。

二人に倣って、一洋も、¹もこもこの上半身からなかなか離れてくれないランドセルを下ろす。放課後、午後三時過ぎ、走る二人を追って辿り着いたのは、小学校から少し離れたところにある堤防だった。通学路から河川敷に下りるまでの斜面は、もともとは芝生らしいが、今はきれいに雪に覆われている。

一月の太陽は、一洋の目線と変わらない位置にある。雪の降りやんだ午後三時の光は、この町の全てを溶かしてしまふようなほど強烈なのに、雪の斜面はその光をも吸い込んで白く膨らんでいるように見える。²冷たい氷の結晶というよりも、天日干しによってふかふかになった布団みたいだ。

「お前、ランドセルなんて使ってるのかよ」

雄介がそう言いながら、道路にどっかと腰を下ろす。スキーの授業のときにも着ていたごわごわのズボンは、雪の上に座っても水が染みてこないらしい。

「うん、今までずっとこれだったし」

「こつちだとそんなの誰も使ってねえぞ」

雄介はそう言いながら、さつきまで背負っていたリュックの中をさがそと漁っている。リュックが濡れてしまふどころか、こうしている間に車が来るかもしれないとか、そういうことも気にしていないらしい。

「冬はウェアとか着るから、ランドセルだときつくなっちゃうんだよね」

そう言う智也も雄介と同じように、その場に座り込んで、リュックの中を忙しく漁っている。

言われてみれば確かに、教室のロッカーにもランドセルはしまわれていなかったような気がするし、現にこの二人もあまり見慣れないリュックを使っている。一洋は急に、白い雪の上にある黒いランドセルがものすごくダサイもののように見えってきた。持ち物をみんなと揃えることは、転校してからまずすべきことの一つなのに。

体操服も自由。カバンも自由。

³少し前までの自分なら、きつと、もつと喜んでいた。

「あつた！」

揃って声を上げたかと思うと、智也と雄介はそれぞれ、リュックの中に突っ込んでいた右手を抜き出した。その手には、パツと見ただけではわからない、白い塊のようなものが握られている。

「袋？」

マフラーを鼻まで引き上げながら、一洋は訊く。そういえば、全校集会のときだって、二人とも袋、袋、と言っていた。

一洋の呟きなど聞こえていないのか、雄介は、スーパ―などでもらう白い袋を手袋をしたままの手でどうにかまっすぐに伸ばしている。かと思うと、

⁴「あ、智也が持つてるやつの方がやりやすそうじゃん。よし、おれのと交換な」

智也が持っていた袋を勝手に奪い取り、「よっしゃー！ 久しぶり！」とその袋を雪の上に敷いた。そして、まるでそれが座布団だというように、袋の上にどんと腰を下ろした。

「いっきまーす！」

雄介は右手を挙げると、股の間にある袋の取っ手の部分を握り、えいっと両脚で地面を蹴り出した。

ソリだ。一洋がそう思ったとき、

「袋は、ソリになるんだよ」

同時に智也が呟いた。「おーすげえ滑るー！」そのころには、雄介はもうかなり下のほうまで進んでいた。途中、何かにつっかかったのか、「つおわああああ！」文字にならない声を上げながら袋もるところころ転がってしまっている。

「つるつるしてるから、普通のソリよりよく滑るんだよ」

⁵はい、と、智也が一洋に向かって白い袋を差し出してくる。家でもよく見るただの袋が、風になびいて、こつちにおいでと手招きをする。

「ありがとう」

袋で滑るソリ遊びは、何度やったって飽きなかった。石ころに引っかかったり、無理に引っ張ったりするとすぐに破れてしまったけれど、智也も雄介も、親に隠れてたくさんの袋を確保してきていたから、数が足りなくなることはなかった。雪が降る季節になると、袋をこっそり集めておいて、こうしてたまにソリ遊びをするらしい。

斜面を滑り降りたら、今度は雪の中を歩いて登る。そしてまたすぐに滑り降りる。普通に滑ったり、正座で滑ったり、立ったままスノーボードみたいにして滑ったり。運動神経のいい雄介が新たな技をたくさん見せつける中、一洋は智也とふたり、いろいろなことを話した。

「前田くんは、転校いっぱいしてるの？」

「うん。広島とか、この前は神奈川」

「かながわ？ ってどのへんだっけ？」

「東京の近く。今までいたところはこんなに雪降らなかったからさ、すごいね、こんな遊び初めて。やっぱこっちの人はみんな冬が好きなの？」

「そんなことないよ。僕は雪遊びは好きだけど、冬は嫌いな。ずっと寒いし、体育のスキーも苦手だし」

「そっか。あれ、うまくならないなあ」

一洋の手袋や靴は、智也や雄介のそれらとは違って、きちんと水を弾いてくれない。だから、滑ったり転んだり歩いたりするたびにしっとり冷たさが染み込んできたけれど、途中からもうそんなことは気にならなくなっていった。スキーの授業で何度も尻もちをついたから、お尻だっけじんじん痛い。体はすごく熱いのに、手足の指先だけはすごく冷たい。だけど楽しいからいい。楽しいからいいのだ。

こっちに来て、初めて雪を見たときから、本当はずっとこういうふうに遊びたかった。親はどちらも寒い寒いと言って雪遊びをしてくれないし、一洋にはきょうだいがない。うまくできないスキーで尻を打ちつけるのと、袋でできたソリから転げ落ちて尻を打ちつけるのでは、同じ痛みでもその種類が全く違った。

「げっ、お前、ももひきみたいなの穿いてんじゃん、ダッサー」

ソリ遊びに飽きると、雄介は一洋にちよっかいをかけてくる。ちよっと言動が乱暴なところもあるけれど、それが友達って感じがして、一洋は嬉しかった。

「ももひきじゃないよこれ、タイツ？ ってお母さん言ってた」

「こっちの人はそういうの穿かないんだよね、なんか」

「えー、でも寒いじゃん」

「それを我慢するのがかっこいいんだろー」

まだ馴染めないところはたくさんあるけれど、それでも一洋は、スノーパーの袋で雪の上を滑り降りるたびに、自分の心と体がむくむくと元の形を取り戻していくのがわかった。

「あー、疲れたー、あっちー尻いてー」

「ちよっと汗かいてきちゃったよね」

斜面を夢中で往復していると、自分が疲れていることに気が付きにくい。座り込んでみてやっとなんか、自分はこんなにも疲れていたんだ、とわかる。

どんな体勢で座っても、何度も打ちつけたお尻が痛い。

「お尻、じんじんする」

そう呟くと、智也が、

「だね」

と、こちらを向いて笑った。その向こうで、雄介がお尻を押さえながら、「いててて」と呟いている。

一洋はふと、そう思った。今この瞬間、本当の意味で、自分の暮らす場所が変わったことを、やっとなんか実感したような気がした。

転校は、学校が変わるだけではない。学校に通っていない時間を過ごす場所だって、変わるのだ。そんな当たり前のことが、はじめはなかなか理解できない。学校が変わったことを実感できるタイミングはたくさんあるけれど、自分が暮らす場

所そのものが変わったことを受け入れることは、実は難しい。

「お前、スキーでもいっぱい転んでたし、この中で一番お尻痛いんじゃないの？」

「うるさいなあ」

雄介が一洋の尻を触ろうとしてくる。「やめてっば」一洋は雄介に雪をかけて応戦する。

知らないクラスメイトたち、これまでの学校ではなかったスキーの授業、これまで抱いたことのなかったお尻の痛み。通う学校が変わったことを実感するタイミングは、転校初日から何度もあった。だけど、ようやく今、自分の暮らす場所が変わった、そしてこれからもこの場所で暮らしていくことをきちんと受け止めることができた気がする。

この土地独特の遊びを通して抱いたお尻の痛みを、ひとりで感じるのではなく、誰かと共有することができた、今。新しい何かに出会い、その新しさに出会った自分の戸惑いを、誰かが笑ってくれた、今。

「土日にスキーウェアとか買いに行くの？」

斜面を上りながら、智也が言う。いつのまにか、太陽の色が変わっている。ただ白だけだった雪の粒にも、夕暮れの端っこが数滴、注ぎ込まれているように見える。

「行く、と思う。お母さんが連れてってくれれば」

「ふうん。行けるといいね」

「ついでになんかカバンも買ってもらえば？ ランドセルやっぱダセエし」

斜面を上り切ると、そこには、一時間ほど前に脱ぎ捨てたカバンが三つ、転がっている。リュック、リュック、ランドセル。

「二人、リュック、色違いなんだね」

一洋は自分のランドセルを持ち上げながら呟く。

体操服も自由。カバンも自由。

¹²自由、という言葉は、すごく嬉しい言葉だった。

「前田くんもこれにしたら？」

よいしょ、と、智也がリュックを持ち上げる。

「水弾くやつだから、雪降っても濡れないんだよ、中身」

「どこで買ったか忘れたけどなー」

帰る帰ろ、と、雄介がさっさと歩き出す。袋ちゃんと持って帰れって、と、智也が余った袋を掴んだまま雄介を追いかけていく。一洋は、二人の背中と同じように揺れるリュックを見つめた。

(朝井リョウ『死にがいを求めて生きているの』)

【設問】

問一 —— 線部1「もこもこの上半身からなかなか離れてくれないランドセル」とあるが、この表現からどのようなことが分かるか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 雪国の生活に慣れない一洋が、ランドセルを濡らしてはいけないと思っていること。

イ 一洋が雪国の閉じこもった生活の中で太ってしまい、すばやく動けないということ。

ウ 雪国の寒さで一洋のランドセルは固くなっており、下ろしにくいということ。

エ 一洋が必要以上に服を着込んでいて、雪国の生活にまだ十分に慣れていないこと。

問二 —— 線部2「冷たい氷の結晶というよりも、天日干しによってふかふかになった布団みたいだ」とあるが、この表現

はどのようなことを表していると考えられるか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 雪遊びをする斜面の雪は降り積もったばかりで、ふかふかした布団のように寝ごちが良いということ。

イ 雪はつらいものではなく、自分たちを受け入れてくれる親しみやすいものだと感じられるということ。

ウ 太陽の反射で輝く雪国の風景は、洗い立ての真っ白なシーツを敷きつめた布団を思い出させるとのこと。

エ 雪国の降り積もった新雪は冷たい氷と違い、たくさん空気をふくんでいて暖かく感じられるということ。

問三 —— 線部 3 「少し前までの自分なら、きつと、もつと喜んでいた」とあるが、今はそれほど喜べないのはなぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 前の学校では仲の良い友人がたくさんいて、自由に持ち物を選ぶことをいっしょに喜ぶことができたが、新しい学校では喜びを分かち合えるような親しい友人はまだできていないから。

イ 他の子と同じ持ち物にそろえようにも、みんな自由に選んでいるためにそろえようがないし、そもそもどんな持ち物がふさわしいのかも分からず、何を選んで良いか分からないから。

ウ 持ち物について細かく指定されているならば、体操服やカバンを自由に選べるようになることは大きな喜びだが、ここでは自由に選べるのがあたりまえなので、特別に喜ぶことではないから。

エ 今はまだどんな持ち物を選べば良いのか分からないし、新しい土地で決まりを守り規則正しい生活を送る決意をしたところなので、自由に持ち物を選ぶことに魅力を感じないから。

問四 —— 線部 4 「あ、智也が持つてるやつのほうがやりやすそうじゃん。よし、おれのと交換な」とあるが、この発言から雄介はどのような人物であることが分かるか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 関わりやすい相手には気をつかうが、親しい友達には遠慮なくあまえる人物。

イ 意地悪な一面があり、おとなしい相手にはわざといやがることをする人物。

ウ 損得をじっくり考えて、自分の得になることは強引におし通そうとする人物。

エ 相手の気持ちよりも自分の気持ちを優先して、思うがままにふるまう人物。

問五 —— 線部 5 「家でもよく見るただの袋が、風になびいて、こっちにおいてと手招きをする」とあるが、この表現はどのようなことを表していると考えられるか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 袋が風になびいて自ら動いているかのようにえがくことで、ソリ遊びをしている智也と雄介の様子がいきいきとしたものであることを表している。

イ 袋がまるで一洋を呼んでいるかのようにえがくことで、袋の持ち主である智也が一洋を自分たちの仲間として認めただけということを表している。

ウ 袋がまるで意志を持って一洋のことをさそっているかのようにえがくことで、一洋が袋で滑るソリ遊びを早くやってみたいと思っていることを表している。

エ 袋が風にゆられて合図を送ってくるかのようにえがくことで、智也たちに熱心にさそわれている今の状況を一洋が喜んでいることを表している。

問六 —— 線部 6 「途中からもうそんなことは気にならなくなっていった」とあるが、なぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 転校してすぐに親友ができた上、ソリ遊びも上手に滑れたことがとても嬉しく、染み込んだ水の冷たさを忘れてしまったから。

イ 転校してきた雪国で初めて経験するソリ遊びに熱中して体が熱くなり、染み込んだ水の冷たさがかえって気持ちよく感じられてきたから。

ウ 転校してきたばかりで雪国に適した服装をせずソリ遊びをしたので、染み込んだ水の冷たさについてはしかたがないとあきらめたから。

エ 転校してきたばかりの土地で友達とソリ遊びをすることにすっかり夢中になり、染み込んだ水の冷たさなどどうでもよくなったから。

問七 —— 線部7「うまくできないスキーで尻を打ちつけるのと、袋でできたソリから転げ落ちて尻を打ちつけるのでは、同じ痛みでもその種類が全く違った」とあるが、「痛み」の「種類が全く違」うものだと感じたのはなぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア スキーの時は、自分がうまく滑れなかったことで取り残された気持ちでいたのだが、ソリ遊びの時は、智也や雄介といっしょに遊びながら、同じ気持ちになれたことが嬉しかったから。

イ スキーの時は、自分で望んでやるのではなく授業の中でいやな思いをしながら滑っていたのだが、ソリ遊びの時は、初めて雪を見たときから望んでいたソリでの遊びができて満足していたから。

ウ スキーの時は、だれともいっしょにやることができなかつたのでつまらない気持ちでいたのだが、ソリ遊びの時は、智也や雄介という新しくできた友人と初めて遊ぶことができて楽しかったから。

エ スキーの時は、何度も尻もちをつけてしまったせいですっかりやる気もなくなっていたのだが、ソリ遊びの時は、すべてが自分にとって初めての経験であったために意欲にあふれていたから。

問八 —— 線部8「一洋は嬉しかった」とあるが、なぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 雄介が何を着れば良いのか分からない一洋に、ももひきは格好悪いとはっきり指摘してくれたから。

イ 雄介が初めてソリ遊びをする一洋に、乱暴な言葉ではあるが丁寧に遊び方を教えてくれたから。

ウ 雄介が転校生の一洋に対して遠慮することなく、思ったことをそのまま口にしてくれたから。

エ 雄介が一洋に関心を持ち、ソリ遊びをやめてちょっかいを出したり質問をしたりしてくれたから。

問九 —— 線部9「自分の心と体がむくむくと元の形を取り戻していく」とあるが、どういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 転校してきたばかりの土地や人間関係になじめず縮こまっていたが、分けへだてなく接してくれる友達に出会い、ソリ遊びに夢中になるうちに、だんだん本来の自分の姿に近づいてきたということ。

イ なじみのない雪国にやってきて、不慣れた経験が続いて気がふさいでいたが、夢中になって友達といっしょに体を動かすことによって、以前の活発だった自分を急速に取り戻してきたということ。

ウ 今までの学校とはまったく違う環境に身をおいて緊張して生活していたが、ソリ遊びに没頭することで、少しずつ肩の力が抜けて元の自分らしくふるまえるようになってきたということ。

エ 初めて暮らす場所での学校生活によそよそしさを感じていたが、楽しい遊びにさそってくれた友達のおかげで、にわか自分の居場所を見つけたような気持ちになってきたということ。

問十 —— 線部10「今かもしれない。／＼一洋はふと、そう思った。」とあるが、この時、一洋はどう思ったのか。そう思った理由にふれながら、八〇字以上、一〇〇字以内で答えなさい。

問十一 —— 線部11「いつのまにか、太陽の色が変わっている」とあるが、この表現から一洋のどのような様子が分かるか。

次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 夕暮れになるまで、時間が経っていることにまったく気づかないくらい友達との遊びに夢中になっている様子。

イ 昼間の雪に反射して輝いていた太陽の光が夕方のうす暗い光に変わっていった、だんだんと不安になっている様子。

ウ 昼とは違った寒々しい夕暮れの中で、雪で濡れてしまった上着の冷たさやお尻の痛さがたえられなくなっている様子。

エ ものの形がはっきりと見えない夕方のうす暗い風景によって、昔の友達や学校のことを懐かしく思い出している様子。

問五 ――線部12「自由、という言葉は、すごく嬉しい言葉だった」とあるが、なぜ「嬉しい」のか。次の中から適當なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 北国の生活に慣れることで、この土地で使うのにふさわしいものを自由に選ぶことができるから。
- イ 学校に決められたものではなくて、自分の気に入ったものを自由に選ぶことができるから。
- ウ 前の学校で使っていた使い古したものではなくて、新しいものを自由に選ぶことができるから。
- エ いっしょに遊べる友人がいて、その友人とおそろいのものを自由に選ぶことができるから。

二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

次の「ある晴れた日のドライブ」という話を読んでください。

ある晴れた日のことです。父親が自分の息子むすこを車に乗せて、鼻歌まじりでドライブを楽しんでいました。車が交差点にさしかかったところ、信号を無視した大型トラックが右側から突っ込んできて衝突しょうとつしました。父親は即死そくし。息子は瀕死ひんしの重傷を負い、救急車で病院に担ぎ込まれました。病院では、すぐに、腕うでの良い有名な外科医げかが呼び出されました。その外科医は、手術用のマスクと手袋をして勢い込んで手術室に入ってきました。そして、その男の子の顔を見たたん、真っ青になってこう叫びました。「こっ、この子は私の息子！」

この話を読んで、あなたは、「ヘンだ」と思いませんでしたか。「父親は交通事故で死んだはずなのに、外科医として登場している…」と思いませんか。

講義でこの話を聞かせたところ、ある学生は、「交通事故で亡くなったのはア」で、外科医が本当の父親」と答えてくれましたが、交通事故で死んだのはアではなく実の父親であり、この話にはヘンなところも矛盾むじゅんもありません。

心理学では、私たちの頭の中にある、さまざまな情報や知識や記憶きおくなどの「情報のかたまり」のことを「スキーマ」と呼んでいます。

たとえば、スマホに関するあなたのさまざまな情報や知識や記憶は、あなたの「スマホ・スキーマ」ですし、もし、あなたの頭の中に「鈴木さん」のことにに関する情報や知識や記憶のかたまりがあれば、それは「鈴木さんスキーマ」です。

私たちの頭の中には、さまざまな物事や人物についての無数のスキーマが存在そんざいしていて、それぞれのスキーマはお互いたがに関連かん合ごうっています。

すでに頭の中にあるスキーマは、新たな情報を採り入れるときに、チェックする働きをします。もし、あとの情報が、すでにあるスキーマと矛盾しないならば、そのまま採り入れて情報のかたまりを大きくします。

もし、あとの情報が、既存のスキーマと矛盾するならば、矛盾しないように、あとの情報の内容を歪めたり過小評価したりしてから採り入れます。場合によっては、あとの情報は無視して、無かったことにします。

既存のスキーマは、新たな情報に対してチェックする働きをしますが、かたく固まって動かないものではありません。新たに採り入れた情報の種類や強さによって、既存のスキーマが大きくなったり、形を変えたり質的に変容したりして、それまでのスキーマとは違ったものになることもあります。

スキーマは情報を採り入れながら変容し続ける動的な特徴を備えています。

たとえば、「知的」という情報を核とする「知的な鈴木さんスキーマ」が、あなたの頭の中にあるとします。この「知的な鈴木さんスキーマ」を持って、あなたが鈴木さんと実際に交流したところ、鈴木さんが感情的で乱暴であることを体験すれば、「知的な鈴木さんスキーマ」は変容します。変容したスキーマに基づいて、それまでの「知的」という情報は評価し直され、組み替えられます。

こうして変容したスキーマは、それ以後の情報に対して、再び、チェック機能を果たします。

さらにスキーマは、実際には存在しない情報を自ら作り出す働きもします。「情報を作り出す」、これがスキーマの重要な特徴ですが、この特徴が、ときどき「困った」結果を引き起こします。

たとえば、「知的な鈴木さんスキーマ」は、「鈴木さんは知的な人だから、アイドルにはキョウミない」と、鈴木さんとアイドルの関係に関する情報がなくても、情報を勝手に作り出します。その結果、現実とは違った鈴木さんを頭の中に思い描きます。

たとえば、偏った「営業職に関するスキーマ」は、佐藤さんが「車のセールスをしている」と聞いて、「佐藤さんは、セールスマン。セールスマンは明朗快活。ゆえに」など誤った三段論法をして、佐藤さんのことを分かったつもりにさせます。

会社名や組織名、相手の肩書きについても、スキーマが勝手に情報を作り出すことがあります。「会社名や肩書きで人を判断するな」というキョウクンをよく耳にするのは、私たちがそのような判断をしがちだからです。

とくに日本は「肩書きの国」です。電話で自分のことをツげるときや名刺交換の際にも、会社名や組織名、肩書きを最初に言っ、そのあとで自分の名前を言います。肩書きスキーマが、私たちや相手のことに関する情報を勝手に作り出しています。

ニュースで見聞きする詐欺事件も、肩書きスキーマが作り出した情報に、幻惑された結果かもしれません。「元国会議員の秘書から、地場産業の異業種交流会発足のためのキフ金を求められ、多額の金をだまし取られた」、(中略)「水道局から水道の水質調査に来たと言われて、高い浄水器を契約させられた」などという事件は、詐欺師が最初に提示した肩書きに、被害者のスキーマが反応して起こったのではないのでしょうか。

職業についてだけでなく、私たちは、性別、民族、集団、血液型など、さまざまな属性についてのスキーマを頭の中に持っています。それらのスキーマを使って、安易に人を判断して、分かったつもりになっています。

あなたは、「加藤さんは、女性なのに理数系が強いんだ」と驚いたり、「○○(国名)人は攻撃的だね」と断定したり、「彼は××教徒の人だから怖い」と怖がったりしたことはありませんか。事実は、男性よりも理数系に強い女性はいくらでもいますし、攻撃的ではない○○人も大勢いるでしょうし、××教徒の人がすべて怖い人だとは限りません。それなのに、断片的な情報だけで分かったつもりになっているのは、スキーマが勝手に作り出した情報のせいです。

血液型を聞いて「あの人はA型だから、のんびり屋さんなんだ」などと短絡的に、人のことを分かったつもりになるのも「血液型・性格」スキーマのせいです。

血液型と性格の間には科学的関連がないことは、心理学者がデータに基づいて、これまでに何度も研究発表をしてきました。日米合計約一万人のデータを調べた結果、血液型と性格の間には統計学的に意味のある関係はなかったという研究もあります。心理学者が科学的根拠に基づいて否定しているにもかかわらず、血液型と性格の間に関連があるという迷信を信じている人が少なからずいるのは、少なくとも次の2つの理由があると考えられます。

一つは、血液型という、いかにも医学的根拠がありそうなものと、性格を結びつけている点です。「生まれた月日で決まる星座と、性格の関係がある」と言われれば、はじめから遊びだと分かった上で楽しめますが、「体中を巡っている血液の型が、性格を決める力を持っている」と言われると、⁵医学的な装いゆえに、簡単には否定しがたくなります。医学的な装いがあるために、この迷信はしぶとく生き続けています。

もう一つの理由は、これまでに^eノべてきたスキーマの働きです。「血液型・性格」スキーマをもっている人は、「血液型・性格」スキーマと合致する情報は、「やはり当たる」と思っ^がて記憶に留^とめて、このスキーマを強固なものにします。

このスキーマと矛盾する情報があると、「例外もたまにはある」などと過小評価したり、無視したりしますので、たとえ反証を突きつけられても「血液型・性格」スキーマは維持^いされます。さらには、「血液型・性格」スキーマによって、情報を勝手に作り出して「やはりB型の高橋さんは変人だ」と納得^なしたりします。

このような経験は、「血液型と性格は確かに関連している」という実感を生み、「血液型・性格」スキーマをさらに強めていきます。

「血液型・性格」信者だけではありません。私たちは、職業や性別、民族、集団など、さまざまな属性について、⁶いったんスキーマを頭の中に持つと、そのスキーマに合う情報や体験は好んで記憶し、合致しない情報は過小評価や無視をするばかりか、スキーマに合った情報を作り出してしまうこともします。

要するに、私たちは自分のまわりの人たちのことを、頭の中のスキーマを使いながら、自分が見たいように見ようとしているのです。

さて、⁷ここまでの説明を読んでいただけたなら、最初に紹介^しした「ある晴れた日のドライブ」の話のナゾは解けたでしょう。⁸「外科医」について偏った職業スキーマと性別スキーマを持つている人ほど、この話を聴くと「ヘンだ」と思います。

あなたは、どうでしたか？

(相川充『人づきあい、なぜ7つの秘訣？ ポジティブ心理学からのヒント』)

④ 矛盾^二すじみちが通らないところ。

肩書き^二地位、身分、役職名。

【設問】

問一 〰〰線部 a～e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ア にあてはまる言葉を、漢字二字で答えなさい。

問三 ——線部 I「新たな情報を採り入れるときに、チェックする働きをします」とあるが、「チェックする働き」とはどのようなものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 新しく採り入れる情報との矛盾が生じないように、自分の持っている「情報のかたまり」を点検し、もとの情報や知識を必要に応じて消去したり、修正したりする働き。

イ 新たな情報と自分の持っている「情報のかたまり」とを照らし合わせ、すでに持っている「情報のかたまり」と矛盾しない部分だけを選んで、そのまま採り入れようとする働き。

ウ 新しい情報が自分の持っている「情報のかたまり」の内容と食い違わないか確かめ、その結果に応じて採り入れる情報を選んだり、どのように採り入れるか決めたりする働き。

エ 新しい情報が自分の持つ「情報のかたまり」の中にすでないか点検し、それまで知らなかった情報だけを採り入れて、「情報のかたまり」をより大きくしようとする働き。

問四 — 線部 2 「かたく固まって動かないものではありません」とあるが、どういうことか。次の中から適當なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「情報のかたまり」が、新しい情報に出会うことによって正しい姿に形を変えていくということ。
- イ 新しい情報がつけたされることで、「情報のかたまり」が変化して大きくなっていくということ。
- ウ もともと頭の中にある情報が組み合わさることによって、「情報のかたまり」が変容するということ。
- エ 「情報のかたまり」が、新たに取り込まれた情報の種類や強さにより変わり続けるということ。

問五 — 線部 3 「^レ困った^ク結果」とあるが、どのようなことが起こってしまうか。次の中から適當なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 限られた情報にもとづいた判断をし、ものごとを正しく理解したつもりになってしまう。
- イ 新しい情報が次々と作られ、いったいどれが正しい情報なのか分からなくなってしまふ。
- ウ 実際には存在しない情報を自ら作り出し、現実を変えようと考えるようになってしまふ。
- エ その情報が正しいか正しくないのかを安易に判断して、分かったつもりになってしまふ。

問六 イ にあてはまる表現を、本文の言葉を用いながら十字以内で答えなさい。

問七 — 線部 4 「詐欺師が最初に提示した肩書きに、被害者のスキーマが反応して起こった」とあるが、どういうことか。

次の中から適當なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 被害者が、提示された肩書きについての正しくない情報や知識を用いることによって、相手がどのような人物なのかを判断してしまったということ。
- イ 被害者が、提示された肩書きについての情報や知識を十分に持っておらず、その場の雰囲気ふんいきだけで相手がどのような人物なのか判断してしまったということ。
- ウ 被害者が、提示された肩書きについて持っていた情報や知識をいかすことができず、印象だけで相手がどのような人物か判断してしまったということ。
- エ 被害者が、提示された肩書きについてすでに持っていた情報や知識をもとにして、相手がどのような人物なのかを判断してしまったということ。

問八 — 線部 5 「医学的な装い」とあるが、どういうことか。次の中から適當なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 心理学では否定された血液型と性格の間の関係を医学的に証明するということ。
- イ 血液型と性格の係に科学的関連があるかのように見せかけているということ。
- ウ 簡単には血液型と性格の係を否定できないようにそれらしく言うということ。
- エ 血液型と性格は無関係であるとする研究結果をなかつたことにするということ。

問九 — 線部 6 「いったんスキーマを頭の中に持つと、（ ）スキーマに合った情報を作り出してしまうこともします」とあるが、どういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 頭の中のスキーマと対応するような情報を求め、他者の考えをふまえつつも自分に合うものの見方を優先すること。

イ 自分の中にあるスキーマと合致するものだけを情報と考え、自分が見たいようにまわりの人やものを見てしまうこと。

ウ 自分の中にあるスキーマをもとにして情報と向き合い、自分の思い込みに合わせてものごとを理解しようとすること。

エ 頭の中のスキーマと矛盾しない情報だけを受け取り、内容を歪めたり、無視したり、作り出したりしてしまうこと。

問十 — 線部 7 「ここまでの説明を（ ）話のナゾは解けたでしょう」とあるが、最初に紹介された話をどのように解釈すれば、矛盾はなくなるか。本文全体の内容をふまえながら、三〇字以内で答えなさい。

問十一 — 線部 8 「『外科医』について偏った職業スキーマと性別スキーマを持っている人」とあるが、『外科医』について「偏った職業スキーマと性別スキーマ」とは、ここでは具体的にどのような思い込みのことであるか。「という思い込み。」につながるように、解答らんに合わせて一〇字以上、二〇字以内で答えなさい。

二〇二〇年度 帰国生入試 国語解答用紙 (1)

受験番号

--	--

氏名

--

	①
	②
	③
	④
	⑤

◆右のらんには何も書かないこと。

	解答用紙2
--	-------

合	計

問一

工

問二

イ

問三

イ

問四

工

問五

ウ

問六

工

問七

ア

問八

ウ

問九

ア

問 十				
て	わ	い	共	ソ
い	ゝ	れ	有	リ
く	た	て	レ	遊
ニ	ニ	く	た	び
と	と	れ	ニ	で
を	や	た	と	感
受		と	に	じ
け	ニ	感	よ	る
入	れ	い		お
れ	が		て	尻
ら	ら	自		の
れ	も	分	二	痛
た	こ	の	人	み
と	の	暮	が	き
思	場	ら	自	智
	所	す	分	也
た	て	環	を	ヤ
	暮	境	お	雄
	ら	が	が	介
	し	変	え	と

問十一

ア

問十二

工

受験番号

--	--

氏名

--

	①
	②
	③
	④
	⑤

小計

--

◆右のらんには何も書かないこと。

二

問 一	
d	a
寄付	興味
e	b
述	教訓
	c
	告

問二
養父

問三
ウ

問四
エ

問五
ア

問六
佐藤さんは明朗快活

問七
エ

問八
イ

問九
ウ

問十
子のこの外科医は女性であり、重傷を負った男の母親である。

問十一
腕の良いた有名な外科医は男性である。という思い込み。